

『レフト・ビハインド』が内包している問題点の解明とその克服の処方箋—凸凹神学会講演準備ノート（12）ラッド著、安黒務訳『終末論』「第一章 聖書の預言をどのように解釈すべきか」、「二章 イスラエルについてどうか」、エリクソン著、安黒務訳『キリスト教教理入門』「第 41 章 千年期と患難時代の見方」、Wayne Grudem, “Systematic Theology”, ‘Church and Israel’ から、ポイントを学ぶ

*

※ ユーチューブ・サイトの一宮基督教研究所の礼拝のメッセージ集の、「『レフト・ビハインド』問題の解明と克服シリーズ」から漸次傾聴していくことができます。

*

※大頭眞一先生主催の凸凹神学会(ズーム)『レフト・ビハインド』が内包している問題点の解明とその克服の処方箋」4/15(木) 13:30-15:30 に関心のある方は、大頭先生“mailto:gospel.ozu2@gmail.com”に直接お問い合わせください。

2021年4月11日『レフト・ビハインド』問題—解明と克服シリーズ、(5)「いつの時代でも、聖霊は教会に対し、聖書による神の啓示に忠実であるかどうかの精査を命じられる」

*

序一

1. 先週は、イースターでした。「イースター礼拝メッセージ: キリストのイースター(復活の日)、私たちのイースター(復活のからだを着せられる日)」と題して、キリストの再臨の日が、私たちが復活のからだを着せられる日であるとお話しました。
さて、いよいよ、今週、凸凹神学会での講演奉仕です。その内容は、キリストの再臨の日、私たちが復活のからだを着せられる日に関する内容です。依頼されているテーマは、その再臨の出来事の一部—「現代社会に終末が訪れたことを仮想した小説『レフト・ビハインド』は、聖書のメッセージと合っているのでしょうか?」という問いです。
 - a. 現代社会に終末が訪れたことを仮想した小説『レフト・ビハインド』には、どのようなことが書かれているのでしょうか。その内容は聖書のメッセージとどのような関係にあるのでしょうか。小説『レフト・ビハインド』では、伝統的なディスペンセーション主義の終末論に沿った「終末論」理解が反映されています。
 - b. 伝統的なディスペンセーション主義の終末論に沿った「終末論」理解とは、どのような内容なのでしょうか。そして、聖書的な終末論理解とどのように違

いがあるのでしょうか。それを図示してみましたので、これらを見比べつつ、今朝も聖書を学んでまいりましょう。

c. この課題に取り組む私たちのスタンスを明らかにしておきたいと思えます。それは、1977年に教派的背景を異にする福音派の指導者たちと、大学、神学校関係者たちとによる研究会議が開かれ、その際40名の署名をもって公表されたアピール「シカゴ・コール」の冒頭の言葉です。

d. 「シカゴ・コール」には、「いつの時代でも、聖霊は教会に対し、聖書による神の啓示に忠実であるかどうかの精査を命じられる。…おのおのの伝統を謙虚にかつ批判的に精査し、間違って神聖視されている教えや実践を捨て去ることによって、神は歴史上のいろいろな教会の流れの中で働いておられることを認識しなければならない」(宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』(いのちのことば社、1993)244頁、と記されています。

e. 私たちは、むやみに立場の異なる人の聖書解釈や教えを批判してまわることは差し控えなければなりません。しかし、明白に誤りであると立証されている教えや運動が広まろうとしている際には、「神の奥義の管理人」のひとりとして、沈黙することは罪です。私たちは、立場やサラリーやポストを守ろうとして沈黙すべきではありません。その時代その時代において、聖霊に導かれ、それらの運動や教えが「聖書による啓示に忠実であるかどうか」の精査に取り組みねばなりません。私たちの所属団体や母校の伝統や交わりの中にある「間違って神聖視されている教えや実践」を謙虚にかつ批判的に精査し、健全化に尽力し続けなければなりません。

f. 伝統的なディスペンセーション主義の終末論に沿った「終末論」理解とは、どのような内容なのでしょう。そして、聖書的な終末論理解とどのように違いがあるのでしょうか。

*

2. 共通項と相違点

- a. 両者は、同じような「旧新の両聖書を靈感された神の言葉」とする聖書観に立脚しています。
- b. 両者は、大半の教理を共有しています。
- c. 相違点は、聖書解釈法と教会論と終末論の中にあります。
- d. 聖書解釈法においては、伝統的なディスペンセーション主義では、「イスラエル民族を軸として旧新約聖書を解釈しよう」とします。これに対して、イエスと使徒たちは「イエス・キリストの人格とみわざを軸として旧新約聖書を解釈しよう」とします。

- e. 教会論では、伝統的なディスペンセーション主義では、「神の民を、イスラエル民族とキリスト教会の二つに分けて理解しよう」とします。これに対してイエスと使徒たちは「神の民を、ひとつの民として理解しよう」とします。
- f. 終末論では、伝統的なディスペンセーション主義では、「イスラエル民族の栄光の回復を中心に解釈しよう」とします。これに対して、イエスと使徒たちは「普遍的な神の国の完成を中心に解釈しよう」とします。

では、以下、「本論」で、ラッド、エリクソン、グルーデムの著書から、ポイントを拾いつつ学びたいと思います。

※本論と聖書朗読箇所は、下記の PDF ファイルを参照してください。

*

1. 【ラッドの記述より学ぶ】

- a. さて、ラッド著『終末論』pp.6-7 には、「旧約聖書において、終末的救いはいつも、イスラエル民族の民族的、神政政治の運命の視点において描かれている。旧約聖書の中にはキリスト教会についての明確な預言は存在しない。実のところ、異邦人はイスラエルの未来においてひとつの場所を与えられている。しかし異邦人の位置づけについて、旧約聖書に統一的な概念は存在しない。異邦人は、しばしば力づくで強制されてイスラエルに仕えさせられ、服従させられている。(アモス九・一二、ミカ五・九一一三、七・一六一一七、イザヤ四五・一四一一六、四九・二三、六〇・一二、一四)。他の事例においては、異邦人はイスラエルの信仰に回心し、イスラエルの神に仕えるものとしてみられている。(ゼパニヤ三・九、二〇、イザヤ二・二一四、四二・六一七、六〇・一一一四、ゼカリヤ八・二〇一二三、一四・一六一九)。イスラエルは神の民のままである。そしてそこでは、イスラエルの救いこそが未来における救いの焦点とされている。」とあります。このような“旧約の影”が、ディスペンセーション主義の影響下にある解釈法の「フレームワーク」を形作っていますね。
- b. これに対し、新約聖書では、ラッド著『終末論』p.23 には、「旧約聖書の預言は、イエスの人格と使命において成就されたものは何であったのか、という視点から解釈されなければならない。つまり、旧約聖書の預言の成就是、その時点で期待されているものとは異なっている。それゆえに、再解釈を必要とする。さらに換言すると、キリスト論であるか終末論であるかは別にして、

教理において最終的に権威のある言葉は、新約聖書の中に見いだされなければならない。」という“聖書解釈の原則”が教えられています。

- c. この「旧約の“イスラエル民族中心主義”の影」から解釈するのではなく、「新約の“イエス・キリストの人格とみわぎの卓越性”の光」から解釈しなければならないことがなかなか理解されないですね。「旧約聖書とは、イエスと使徒たちにとってどのような書物であったのか。彼らはどのような視点で解釈したのか」—そういうことが根本的に問われないまま、「聖書は神の言葉」信仰＝イエスと使徒たちの聖書解釈原則を踏み越えた“字義的解釈”が横行している点が最大の問題と思います。

*

2. 【エリクソンの解説より学ぶ】

- a. 【ディスペンセーション主義千年王国前再臨説】
- b. ディスペンセーション主義者には、自分たちの学説をまず何よりも聖書解釈の方法論であると考え、その中核にあるのは、聖書は文字どおりに解釈されなければならないという確信である。これは、明らかに 比喩を用いている箇所であっても文字どおりにとるべきということではなく、そのまま 意味が通るなら、さらなる解釈を施すべきではないという意味である。これは、部分的に、預言が全く文字どおりに解釈され、かなり細かいところまで解釈されることがしばしばあるということの意味する。具体的には、「イスラエル」は教会ではなく、国家ないし民族としてのイスラエルを指すと常に解釈される。
- c. ディスペンセーション主義は神の言葉に 一連の「ディスペンセーション」(dispensations. 摂理)、すなわち神がそのもとでこの世を管理している経綸(economies)、の証拠を見いだす。これらのディスペンセーションは、神がご自身の目的を啓示する際の連続的な段階である。それぞれが異なった救いの手段を伴うわけではない。救いの手段はいつの時代も同じである。すなわち、信仰を通して恵みによって救われるのである。ディスペンセーションの数に関しては意見が一致しないが、最も一般的な数は七つである。ディスペンセーション主義者の多くは、ある特定の聖書箇所がどのディスペンセーションに当てはまるかに気づくことが最も重要であると強調す

る。たとえば、千年期のために定められた教訓を 用いて今の生活を管理しようとするべきではないということになる。

- d. また、**伝統的なディスペンセーション主義者たちはイスラエルと教会との区別に大きな強調を置く**。彼らの見解では、神はイスラエルと無条件の契約を結んだ。つまり、彼らに 対する約束は、ある条件を満たすかどうかには左右されない。イスラエルは神の特別な民 であり続け、終わりの日には神の祝福を受け る。民族的・国家的・政治的イスラエルは決して教会と混同されてはならない。また、イスラエルに与えられた約束を、教会に当てはまるもの、教会において成就されるものとみなしてはならない。両者は二つの別々の実体である。いわば**神は、イスラエルを主役とする神の取り扱いのドラマを中断しておられるのであるが、必ず未来のある時点でイスラエルを主役としたドラマを再開される**。イスラエルに関してまだ成就されていない預言は、民族としてのイスラエルそのものにおいて成就される。教会の中で成就されるのではない。事実、旧約聖書の預言では教会について触れられていない。**教会は事実上、イスラエルを 主役とする神のドラマ全体の中における、幕間の挿入のようなものである**。そのとき、ディスペンセーション主義において千年期は特別な意味をもつ。**神がイスラエルを主役とするドラマを再開するときには、それに先立って(患難期の直前)教会はこの世から取り去られる、つまり「携挙され」る**。したがって千年期は著しくユダヤ的な性格を帯びるものとなる。イスラエルに関して成就していない預言はすべてこのとき実現する。

*

e. 【患難期前再臨説】

- f. 患難期前再臨説をとる人たちは、他の立場 と明確に区別される独特の考え方をしている。**その第一は患難時代の性質に関してである**。それはまさに“大きな”患難で、歴史の中でこれに比べられるものはない。**これは移行の期間であり、異邦人に対する幕間の神のドラマが終わり、千年期とその中で起こるいろいろな出来事が準備される**。患難時代はどのような意味においても、信仰者を訓練したり教会をきよめたりするときであると理解されるべきではない。

- g. 患難期前再臨説の二つ目の大事な思想は、教会の携挙である。それによると、キリストは大患難の始まりに(実際にはその直前に)来て、この世から教会を取り去られる。この来臨はある意味で秘密である。信仰のない者の目はそれに気づかない。携挙はIテサロニケ4:17に描かれている。「それから、生き残っている私たちが、彼ら[キリストにある死者]と一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります」。キリストは携挙の際、患難時代の終わりに教会と一緒に来臨するときとは異なり、地上まで完全に降臨されることはないということに注目すべきである(図10)。
- h. そうすると、患難期前再臨説は、キリストは二段階で来られると主張していることになる。あるいは二度来臨されるということさえできる。また、復活は三つあることになる。第一は携挙のときの義なる死者の復活である。そのときに生きている信仰者たちが死んでいる人々に優先することはないとパウロが教えているからである。それからキリスト難ト時の再代臨の最後患難時代を、たちの復活がある。
- i. 以上のすべてが、患難時代には教会が存在しないことを意味する。パウロがテサロニケの人々に、信じない人々の上に神が注がれる怒りを経験することはないと約束しているので、我々も救出を期待することができる。すなわち、「神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったから」(Iテサロニケ5:9)であり、イエスは「やがて来る御怒りから私たちを救い出してください」(Iテサロニケ1:10)のである。
- j. ところが、マタイ24章には、選ばれた者の中には患難時代に存在する者がいるという言及があるが、ということなのか。弟子たちが、イエスの来臨と世の終わりにはどんな前兆があるかと尋ねた(24:3。参照使徒1:6)。これはユダヤ人たちを対象にして語られた講話である。したがって、イエスのここでの議論は、主にイスラエルの未来に関係している。福音書が「教会」とか「キリストのからだ」またはそれに類した表現ではなく、一般的な「選ばれた者」という用語を使っていることには意義がある。患難時代に存在するのは教会ではなく選民ユダヤ人なのである。イスラエルと教会というこの区別は患難期前再臨説の決定的で重要な部分であり、ディスペンセーション主義と

近い関係がある。患難時代を、神が主として教会を取り扱う時代から、そもそもの選民、つまりイスラエル民族との関係を再び確立する時代への転換の時と見ている。

*

3. グルーデムより学ぶ

- a. この問題に関して、私たちは、教会を“新しいイスラエル”また新しい“神の民”と理解している多くの新約聖書箇所注目すべきである。「キリストは教会を愛し、御自身を彼女に与えられた」(エペソ 5:25)という事実は、このことを示唆している。さらに、教会に非常に多くのクリスチャンの救いをもたらしている現在のこの教会時代は、神の計画の中での中断とか挿入ではない。ご自身の民へと呼びだす旧約聖書を通じて明らかにされている神の計画の継続である。パウロは「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです」(ローマ 2:28-29)と語っている。パウロは、肉的にアブラハムの子孫である人々がユダヤ人と呼ばれる文字的また生来的な意味があるけれども、“真のユダヤ人”とは人目に隠れた信仰者である人、そして心が神によってきよめられた人であるとより深く、また霊的な意味があるとはっきり認めている。
- b. パウロは、アブラハムは肉的な意味でユダヤ人の父と考えられるだけではない、と語っている。彼はまたより深いまたより真実な意味において「彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、…また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけでなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです」(ローマ 4:11-12; cf. vv.16, 18)。それゆえ、パウロは「しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、『イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる』のだからです。すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです」(ローマ 9:6-8)と行うことができる。パウロはここで、最も真実な意味で“イスラエル”である人々、アブラハムの真の子供は、アブラハムの肉的血統によるイスラエル民族ではなく、キリストを信じる人々であることを意味している。真にキリストを信じる人々は今、主によって“わが民”(ローマ 9:25、ホセア 2:23 からの引用)と呼ばれる特権にあずかっている人々である。それゆえ、教会は今神の選ばれた民である。このことは、肉によるユダヤ人は未来のある時に大規模に回心する

とき、彼らは神の分離された民であり続けることはなく、彼らは「彼ら自身のものであったオリーブの木に接ぎ木」される(ローマ 11:24)。このことを示唆しているもうひとつの箇所は、ガラテヤ 3:29 の「もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです」である。同様に、パウロは、クリスチャンは「真の割礼の者」(ピリピ 3:3)であると語っている。

- c. イスラエルの民から分かれた群れとしての教会について考えることから離れて、パウロは、彼らが以前は「イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人」(エペソ 2:12)であった。しかし、今や彼らは「キリストの血によって近い者とされた」(エペソ 2:12)と彼らに語りかけるようにエペソにいる異邦人信仰者たちに書いている。そして異邦人が教会に加えられたとき、ユダヤ人と異邦人はひとつの新しいからだに統合された。パウロは、神は「二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、敵意を廃棄され…二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです」と語っている。それゆえ、パウロは、異邦人は「聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です」と言うことができた。新約聖書の教会に対する旧約聖書の背景の広範な自覚に関して、パウロはなお「異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり」(エペソ 3:6)ということができた。その箇所全体は、ユダヤ人信仰者と異邦人信仰者がキリストあってひとつのからだに統一されることについて力強く語っている。そしてキリストのひとつのからだである教会の包摂されずに救われ、ユダヤ民族に対する別個の計画があるとのいかなる示唆も決して与えられていない。教会は、それ自身の中にすべての真の神の民を合体させる。そして、旧約聖書の神の民に使用されてきた称号のほぼすべてがいろいろな箇所で新約聖書の教会に適用されている。
- d. ヘブル 8 章は、教会をイスラエルに関する旧約聖書の約束の受領者、そしてその成就としてみることに関するもうひとつの論拠を提供している。クリスチャンが属する新しい契約について言及する脈絡において、ヘブル書の著者は、「主が、言われる。見よ。日が来る。わたしが、イスラエルの家やユダの家と新しい契約を結ぶ日が。…それらの日の後、わたしが、イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、主が言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」(ヘブル 8:8-10)と言われるエレミヤ 31:31-34 からの広範な引用を与えている。ここで著者は、イスラエルの家とユダの家と新しい契約

を結ぶという主の約束を引用する。そしてそれは今教会と結ばれた新しい契約であると語っている。その新しい契約は教会にいる信仰者が今一員である契約である。著者が、旧約聖書のイスラエルへの約束の成就を見出しているのは、真の神のイスラエルとしての教会であると見ているという結論を避けることは困難であると思われる。

同様に、ヤコブは多くの初期のキリスト教会への一般書簡を書いた。そして彼は「国外に散っている十二の部族へ」(ヤコブ 1:1)書き送ったと語っている。これは明らかに、彼が新約聖書のクリスチャンをイスラエルの十二部族の継承者であり、成就であると見ていることを示唆している。

- e. ペテロもまた、同じふうに語っている。彼は「散って寄留している」読者に呼びかけている最初の節から、彼が「バビロン」(I ペテロ 5:13)と都市ローマに呼びかけているほとんど最後の節まで、ペテロはしばしば、イスラエルに与えられた旧約聖書のイメージと約束の観点で新約聖書のクリスチャンについて語っている。この主題は、神が旧約聖書におけるイスラエルへ約束された祝福のほとんどすべてを授けられたとペテロが語っている、I ペテロ 2:4-10 において顕著である。クリスチャンが神の新しい“神殿”(5 節)であるゆえに、神の御住まいはもはやエルサレムの神殿ではない。クリスチャンは今、神の御座(4-5, 9 節)に近づくことのできる真の“王である祭司”であるゆえに、神に受け入れられる犠牲をささげる祭司はもはやアロンの家系を必要としない。クリスチャンは今真の“選民”(9 節)であるから、神の選民はアブラハムから血縁的な子孫の人々であるとはもはや言われない。クリスチャンは今神の真の“聖なる国民”(9 節)であるから、神によって祝福された国民はイスラエルの国民であるとはもはや言われない。クリスチャン—ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャン—がいま“神の民”であり、“あわれみを受けた”者であるから、イスラエルの民はもはや神の民であるとはいわれない。さらに、ペテロは旧約聖書の脈絡から、神が彼に対して執拗に反逆し、彼が据えられた尊い“礎石”(6 節)を拒絶する彼の民を退けられることを繰り返し警告しているそれらの引用を取り上げている。教会は今神の真のイスラエルであり、旧約聖書においてイスラエルに約束されたすべての祝福を受け取ることを確信をもって私たちに話すために、これ以上どんな言及が必要とされるのか。

【結語】

最初に、シカゴ・コールの言葉—「いつの時代でも、聖霊は教会に対し、聖書による神の啓示に忠実であるかどうかの精査を命じられる。…おのおのの伝統を謙虚にかつ批判的に精査し、間違って神聖視されている教えや実践を捨て去ることによって、神は歴史上のいろいろな教会の流れ

の中で働いておられることを認識しなければならない」をもって始めました。

福音主義神学に立脚する私たちにとって、「聖書による神の啓示に忠実であるかどうか」は、旧約聖書の影―「イスラエル民族の栄光の回復」にあるのではなく、新約聖書の光―「イエス・キリストの人格とみわざの卓越性」にあることを理解していただけたのではないのでしょうか。

今日、多くの主にある同労者、兄弟姉妹が「間違って神聖視されている教えや実践」を捨て去る一助となればと願います。

0. 【聖書朗読箇所】

【新改訳 2017】

1. ロマ

- a. 2:28 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上のからだの割礼が割礼ではないからです。
- b. 2:29 かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。その人への称賛は人からではなく、神から来ます。

2. ロマ

- a. 4:11 彼は、割礼を受けていないときに信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じるすべての人の父となり、彼らも義と認められるためであり、
- b. 4:12 また、単に割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが割礼を受けていなかったときの信仰の足跡にしたがって歩む者たちにとって、割礼の父となるためでした。

3. ロマ

- a. 9:6 しかし、神のことばは無効になったわけではありません。イスラエルから出た者がみな、イスラエルではないからです。
- b. 9:7 アブラハムの子どもたちがみな、アブラハムの子孫だということではありません。むしろ、「イサクにあって、あなたの子孫が起こされる」からです。
- c. 9:8 すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもなのではなく、むしろ、約束の子どもが子孫と認められるのです。

4. ロマ

- a. 9:24 このあわれみの器として、神は私たちを、ユダヤ人の中からもだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。
- b. 9:25 それは、ホセアの書でも神が言っておられるとおりです。「わたしは、わたしの民でない者をわたしの民と呼び、愛されない者を愛される者と呼ぶ。
- c. 9:26 あなたがたはわたしの民ではない、と言われたその場所で、彼らは生ける神の子らと呼ばれる。」

5. ペリ

- a. 神の御霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇り、肉に頼らない私たちこそ、割礼の者なのです。

6. エペ

- a. 2:14 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、

- b. 2:15 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、
- c. 2:16 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。
- d. 2:17 また、キリストは来て、遠くにいたあなたがたに平和を、また近くにいた人々にも平和を、福音として伝えられました。
- e. 2:18 このキリストを通して、私たち二つのものが、一つの御霊によって御父に近づくことができるのです。
- f. 2:19 こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。
- g. 2:20 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。

7. エペ

- a. 3:5 この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていませんでしたが、今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。
- b. 3:6 それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということなのです。

8. ヘブル

- a. 8:8 神は人々の欠けを責めて、こう言われました。「見よ、その時代が来る。——主のことば——そのとき、わたしはイスラエルの家、ユダの家との新しい契約を実現させる。
- b. 8:9 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握ってエジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。彼らはわたしの契約にとどまらなかったの、わたしも彼らを顧みなかった。——主のことば——
- c. 8:10 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである。——主のことば——わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

9. ヤコブ

- a. 1:1 神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、離散している十二部族にあいさつを送ります。

10. I ペテ

- a. 2:4 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。

- b. 2:5 あなたがた自身も**生ける石として霊の家に築き上げられ**、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、**聖なる祭司**となります。
- c. 2:6 聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしはシオンに、選ばれた石、尊い要石を据える。この方に信頼する者は決して失望させられることがない。」
- d. 2:7 したがってこの石は、信じているあなたがたには尊いものですが、信じていない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった」のであり、
- e. 2:8 それは「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからであり、また、そうなるように定められていたのです。
- f. 2:9 しかし、あなたがたは**選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民**です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです。
- g. 2:10 あなたがたは以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、あわれみを受けたことがなかったのに、今はあわれみを受けています。